慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 「フロンティア理論」100周年：ターナー学説の批判と評価 |
| Sub Title | The centennial of Turner's frontier thesis |
| Author | 岡田, 泰男 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1994 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.87, No.3 (1994. 10) ,p.381(1)- 397(17) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19941001-0001 |
| Abstract | |
| Notes | 論説 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19941001-0001 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」87巻3号（1994年10月）

# 「フロンティア理論」100周年

## ——ターナー学説の批判と評価——

岡　田　泰　男

### 1　フロンティア理論の概要

フロンティアの存在がアメリカの発展を説明する鍵になるという学説を，フレデリック・ジャクソン・ターナーが発表したのは，1893年のことであった。それから1世紀が経過した今日，ターナーの理論は，もちろん古典ではあるが骨董品ではない。私が初めてこの学説にふれたのは，すでに30年以上前の学生時代のことであるが，その後，三田でアメリカ経済史を講義するようになってから4半世紀の間，この理論を紹介してきた。フロンティア理論が100周年を迎えたのを機会に，あらためて，この学説を見直し，それに対する批判の歴史を述べると共に，近年における新たな展開を検討したい。なお，ターナー学説については以前から，いくつか論文を書いてきているので，部分的には旧説のくり返しになることを断わっておきたい。また，ターナー理論は，基本的にはアメリカのフロンティアが消滅した19世紀末までを対象としているが，最近では，かつてフロンティアであった20世紀の西部を扱う研究も多い。今世紀の西部とターナー学説のつながりについては別の論文を書いたので，ここではふれぬこととしたい。(1)

まず，フロンティア理論のアウトラインを記しておこう。この部分はアメリカ史の専門家にとっては全く不要であるが，本誌は必ずしも専門家のみを対象としたものではなく，また後の議論にとっても必要であるので，あえて記すことにする。ターナーの理論の中心的部分は，1893年，シカゴのアメリカ歴史学会で発表された「アメリカ史におけるフロンティアの意義」に含まれているので，そこからの引用を主とするが，その後発表された論文からの引用も一二，加える。その方がターナーの主張をより明確に示すことができると思われるからである。(2)

---

（1）　岡田泰男「アメリカ西部とフロンティア——ターナー学説と20世紀西部史研究」『社会経済史学』59巻4号（1994年）。

（2）　以下の引用のうち，1～9，10の前半，11の部分は Frederick J. Turner, "The Significance of ↗

1．「(19世紀末までの) アメリカ史は西部開拓の歴史であった。自由な土地の存在，その絶え間ない後退，アメリカ人の開拓地の西への前進が，アメリカの発展を説明する。」

2．「アメリカの発展は単一の線上の進化のみではなく，絶えず前進するフロンティアにおいて未開の状態へ戻り，そこが新たに発展するという姿をとった。すなわち，フロンティアで絶えずスタートがくり返された。この再生のくり返し，アメリカ人の生活の流動性，新しい機会をもたらす西部への拡大，そして未開社会の単純さと接触し続けたことが，アメリカ人の性格に大きな影響を与えた。」

3．「フロンティアは西部開拓の最前線であり，野蛮と文明の出会う場所である。……アメリカのフロンティアの最大の特徴は，その彼方に自由な土地が拡がっていることである。」

4．「フロンティアは最も迅速かつ効果的なアメリカ化の場所である。……フロンティアの前進はヨーロッパの影響からの離脱と，アメリカ的な道での自主独立の成長が着実に進行することを意味した。」

5．「合衆国は（人類の）社会の歴史に巨大な1ページのように横たわっている。西部から東部へ，この大陸のページを行を追って読んでゆけば，社会の進化の記録を見出すことになる。それはインディアンと猟師で始まる。続いて商人が登場して野蛮状態が崩れる。そして牧場の生活，人口まばらな農村での粗放的農業，人口稠密な農業地域の集約農業と歴史を読み進み，最後に都市と工場の工業社会のページとなる。……カンバーランド峠に立って，一列になって前進してゆく文明の行進を見よう。塩泉への道をたどるバッファロー，インディアン，毛皮商人と猟師，牧畜業者，開拓農民と続き，フロンティアは過ぎてゆく。……前進の速度は一様ではないので，フロンティアを，商人のフロンティア，牧畜業者のフロンティア，鉱夫のフロンティア，農民のフロンティアと区別することができる。」

6．「フロンティアは，アメリカ人という混合的な国民の形成を促進した。……フロンティアのるつぼの中で、移民はアメリカ化され，自由になり，一つの混ざりあった人種に融合した。」

7．「フロンティアの前進は，イギリスへの（経済的）依存を減少させた。大西洋岸，とくに南部は多様な産業を欠き，イギリスに依存していた。……フロンティアが海岸から離れるにつれ，イギリスがその商品を直接消費者に渡し，輸出用作物を運び出すことは困難になった。輸出用作物は，多様化した農業にとってかわられる。……フロンティアの前進は，ボストン，ニューヨーク，ボルティモア等の海港都市を『興隆しつつある帝国の交易』への競争に向かわせた。」

8．「連邦政府の権力を発展させ，その活動で大きな役割を演じた法律は，フロンティアの要求

---

↘ the Frontier in American History" (1893)，10の後半は，"The Problem of the West" (1896)，12は "Contributions of the West to American Democracy" (1903) からの引用である。これらはすべて下記の書物に収められているので，その頁を示すこととする。Turner, *The Frontier in American History* (New York, 1920), pp. 1, 2, 3, 3-4, 11-12, 22-23, 23-24, 24-27, 30, 32, 37, 212, 259.

に応ずるものであった。……土地，関税，国内開発に関する法律は，フロンティアの考え方と必要によって条件づけられたと言ってよい。」

9．「フロンティアの影響の中で最も重要なことは，アメリカとヨーロッパにおける民主主義を促進させたことである。フロンティアは個人主義を生み出す。……それは反社会的であり，支配，とくにどんな直接的支配にも反感を生じさせる。オズグッド教授は，植民地に一般的であったフロンティアの状態が，アメリカ革命を説明する重要な要素であると述べた。……フロンティアの個人主義は，最初から民主主義を促進してきた。」

10．「自由な土地が存在する限り，財産を得る機会は存在し，経済的な力は政治的な力をもたらす。」「誰もが，ほとんど望みさえすれば農場を手に入れられる所では，経済的平等は容易にもたらされ，それは政治的平等を伴った。」

11．「フロンティアでの生活の状況から重要な知的特徴が生じた。……鋭敏さや好奇心の強さと結びついた粗野さと力強さ，都合のよい手段を素早く見つける実際的で創意に富む気質，芸術的な才能は欠いているが，大きな目的を達成するには有効な物質的事物を把握する能力，休むことのない力強い精力，善くも悪しくも働く優勢な個人主義，そしてさらに，自由に伴う快活さと活力の豊かさ，これらがフロンティアの特性，もしくはフロンティアが存在するために生じた特性である。」

12．「重要なことは，合衆国の開拓地の西側に，いつも自由な土地が拡がっていたことである。東部で社会的条件が固定化する傾向のあるとき，資本が労働を圧迫したり，大衆の自由を妨げるような政治的束縛のあるときには，いつでもフロンティアの自由な状態へ逃れるこの門があった。自由な土地は，個人主義，経済的平等，立身出世の自由，民主主義を促進したのである。」

以上，ターナー自身の文章により，フロンティア理論の大要を示した。ターナーの学説については，定義が不正確であるとか，表現が文学的すぎて曖昧であるとかいう批判がある。こうした批判には，うなずけるところもあるが，ターナーの文章を読んでみれば，それほど不明確ではないことが解るであろう。正確でさえあれば無味乾燥でも良いという学問分野もあるかもしれないが，最近の歴史学界では，社会史はもちろん，経済史においても，ターナーのような「読ませる文章」が求められている。

ターナーは，上記の(1)(2)において，アメリカ史はフロンティアの開拓の歴史であり，それがアメリカ史，そしてアメリカ社会の特殊性，独自性を生んだと述べる。彼が論文を発表した当時は，アメリカ史はヨーロッパ史の一部にすぎず，アメリカの諸制度の崩芽はすべてヨーロッパに生じたとされていた。ターナー学説は，すでに経済的にはヨーロッパを凌駕しつつあったアメリカの，ナショナリズムの表現ともいえる。さらに1890年の国勢調査の結果，フロンティアの終了が告げられたことが，その歴史的意義を考えさせる契機となったのであり，その意味では時代の要請に応えた理

論といえよう。しかし，この学説はその場限りのものに終らなかった。西部の重要性を強調したターナー理論は，西部史研究という新分野を生み，やがてアメリカ各地の大学で講座が開かれた。教員のポストが増大しただけではない。その後，数十種ものテキスト，数多くの通俗書が出版され，西部史専門の雑誌も生れた。この理論は一大産業を生み出したとすらいえるのであり，しかもその後のアメリカ人の思考に大きな影響を与えた。経済学でいえば，ケインズ理論に匹敵する重要性を持つというべきであろうか。(3)

かかる影響力の大きさの理由は，フロンティア理論が，その構想と説得力において優れているからに他ならない。アメリカがヨーロッパからの移住者によって植民され，その文化を受け継いだことは否定できないが，アメリカの発展には，ヨーロッパと明らかに異なる点がある。ヨーロッパでは近代の経済成長以前に開墾期は終了しており，工業化は農村の解体と都市への人口集中をもたらした。これに対し，アメリカでは工業化，都市化と平行して西部の開拓が進展し，農地拡大，農村人口増加が見られた。これは単なる量的拡大にとどまらず，質的変化を伴った。ターナーが(3)で述べる如く，開拓地の彼方には，白人居住者のいない「自由な土地」が拡っており，その結果，(4)にあるようにアメリカ的な独自の発展がもたらされた。なお，開拓の進展を一種の発展段階説風に図式化すれば，(5)に記された如くになる。但し，これはアメリカの発展が人類一般の社会進化の過程をなぞるという意味ではない。むしろ(6)以下に示された特殊性が重要である。

(6)では，フロンティアが人種のるつぼであり，そこでアメリカ国民が形成されたことが述べられる。(7)では一歩進んで，イギリスの植民地であったアメリカが，開拓進展に伴い経済的に自立し，国民経済の形成へ向うことが示唆される。13の植民地の連合であったアメリカが，独立後，ひとつのまとまった国民国家，国民経済として成長してゆくにあたり，連邦政府の役割は大きいが，(8)においては，連邦権力の拡大とフロンティアとのつながりが示される。

ところで，ターナーがフロンティアの貢献として，最も重要視したのは，(9)の民主主義と個人主義である。民主主義は，ここでは権威を嫌う個人主義と結びつけて論じられているが，(10)においては経済的な要因と結ばれている。(10)は，ほとんど経済決定論の如きであって，誰もが手に入れられる「自由な土地」があるかぎり，経済的平等が保証され，それが政治的平等をもたらすとされている。いいかえれば，経済的民主主義が政治的民主主義の基礎をなしたということである。(11)では，フロンティアの影響を，個人主義をも含めたアメリカ人の国民性に拡げ，実用主義や開拓者精神の源泉はフロンティアにあるとした。この部分は経済史的に読みかえれば，自由な土地という形での機会の存在が，所得分布の平等化をもたらし，他方，開拓地の生活条件が企業家精神や技術革新にとって好ましい環境を生んだということになろう。これらが市場の拡大や経済成長に好都合である

(3) アメリカの大学における西部史の講座や，西部史のテキストについては，次を見よ。Allan G. Bogue, "The Significance of the History of the American West : Postscripts and Prospects," *Western Historical Quarterly* 24 (1993), 45-68.

ことはいうまでもない。

ターナーの主張の中で，最も問題とされてきたのは⑿の前半部分であろう。西部に自由な土地が存在したため，アメリカではヨーロッパのような激しい社会的対立や労働運動が生じなかった，というのがその主旨である。フロンティアが，いわば社会の不満の爆発を回避させる安全弁の役割を演じたところから，安全弁説という名が与えられている。なぜアメリカに社会主義が育たなかったのか，という疑問に対する一つの有力な解答がこれであった。⑿の後半，「自由な土地は」以下の文章は，これまで述べてきたターナーのフロンティア理論の要約といえる。次節ではこの部分を中心に，ターナー学説への批判の歴史を記そう。(4)

## 2 「自由な土地」をめぐって

フロンティア理論は，前にも述べたように時代の要請に応えた学説であった。19世紀末，アメリカ西部ではポピュリスト運動に示されるように農民の不満が高まった。自由な競争を阻害するような独占の弊害も目立ったし，ヘイマーケット事件やプルマン・ストライキのような労働者の紛争も多発した。そして都市のスラムには新移民があふれ，従来からのアメリカ的生活様式や価値観がゆらぐかに感じられた。なぜ，こうした事態が生じたかという人々の不安と疑問に，ターナーは一つの解答を与えた。彼の1893年の論文は「コロンブスの船が新世界の海に到着して以来，アメリカは機会を意味した。……今や，フロンティアはすぎ去り，アメリカ史の最初の時代は幕を閉じた」と結ばれている。フロンティアが終了したことの意味を，人々は納得した。そればかりではない。この理論はアメリカの過去に対する誇りを与え，かつ，やがて開始されるアメリカの海外進出を正当化するためにも利用された。そして，より学問的なレヴェルにおいても，ターナー学説はアメリカ史を説明する支配的理論となっていった。

アメリカの歴史学界で，この理論に対する本格的批判が開始されたのは1930年代であった。次いで批判の波が高まったのは1960年代である。30年代といい，60年代といい，前者は大恐慌とニューディール，後者はヴェトナム戦争と人種問題で，アメリカが大きくゆれ動いた時代であった。この二つの時代は，正統的な価値観やものの考え方への挑戦の時代ともいえる。1890年代には革新的であったフロンティア理論は，1930年迄には，すでに正統的地位を確保し，第2次大戦後も，それを保持していたことが解る。

さて，前節で示した如く，ターナー学説の中心となる概念は「自由な土地」である。これは単に

(4) ターナー学説への批判，もしくは支持の論文を集めた学生向けの書物が，以前いくつか出版された。代表的なものとして，次の2冊をあげておこう。George Rogers Taylor, ed., *The Turner Thesis concerning the Role of the Frontier in American History* (1949, Revised ed. 1956, 3rd ed., Lexington, 1972) ; Ray Allen Billington, *The Frontier Thesis : Valid Interpretation of American History*? (New Yok, 1966).

白人居住者が存在せず，開拓民が自由に入ってゆけるという意味ではない。その土地を自由に取得できるという点が重要である。「フリーランド」のフリーには，「只の，無料の」という意味もあるのであって，無一文の開拓民でも，お金を払わずに土地が取得できるという意味が含められている。これは一見夢物語のようであるが，アメリカの場合には歴史の現実を踏まえている。すでに植民地時代以来，無主地に勝手に入りこんで開墾しているスコッター（無断居住者）という存在があり，それは独立後も続いた。ターナーも旅行記から「マナーの領主のように独立した気持でいる」無断居住者の描写を引用している。独立後，合衆国の所有地（公有地）となった西部の土地は，当初は売却されていたものの，1862年，ホームステッド法により開拓民に無償で与えられるようになった。自由な土地は，まさにフリーという訳である。(5)

とりあえず，こうした史実の上に立ってフロンティア理論は展開されていたとはいえ，土地がどの程度自由であったか，誰もが望みさえすれば手に入れることができたか，という点は厳密には検討されていなかった。30年代の批判は，こうした点を問題とした。なお，自由な土地といってもインディアンが居住していたではないか，という形の批判は1960年代以降のものであって，30年代にはまだ大きくはとり上げられていない。当時の人々の関心の的は，職を失った労働者であり，借金に苦しむ農民であり，土地を追われた小作農や農業労働者であった。こうした状況が，過去において自由な土地が存在したか否か，安全弁が働いたか否かを振り返らせたのである。さらに旱魃や過度の放牧によって『怒りのぶどう』に描かれたような砂あらしが生じたことは，土地利用の方法についての反省ももたらした。

植民地時代以来，アメリカでは土地は豊富であったが，それは開拓促進のために無償で与えられているとは限らず，収入目的で売却もされていた。独立後，財政難に直面した連邦政府が，公有地を売却することとしたのは無理からぬ選択であった。ただし，無償ではなくとも価格や購入条件によっては，貧しい開拓民が土地を取得することは可能である。また時代を追って，土地取得が次第に困難になっていったか否かも問題となる。アメリカの連邦政府は，独立後に2億3千万エーカーの公有地を所有したが，1803年のルイジアナ購入によって5億2千万エーカー，1846年のオレゴン分割や1848年のメキシコからの領土獲得によって更に5億エーカー以上の公有地を取得した。したがって，公有地の供給が不足する恐れはなかったし，売却条件等も次第に開拓民の希望にそう方向に変化し，1862年には前記の如く無償譲渡が実現した。したがって，公有地政策の歴史をたどるならば，大筋としてターナー的見取図の正しさが証明されたかに見える。

しかし，公有地政策の変遷ではなく，公有地処分の実態を研究してみると，上のような楽観的判

---

（5） 公有地の歴史については，大冊ではあるがゲイツの書物が良い。最近のものとしてオウピーの書物がある。Paul W. Gates, *History of Public Land Law Development* (Washington, D.C. 1968) ; John Opie, *The Law of Land : Two Hundred Years of American Farmland Policy* (Lincoln, Neb., 1984).

断はできぬことがわかってきた。何よりも問題とすべき点は，立法者の意図はともあれ，連邦の売却政策の下，公有地が開拓民ではなく土地投機業者の手に渡ったという事実であった。公有地売却に際し，取得面積の最小単位は決められていたが，上限は定められていなかったので，大土地取得が可能であり，西部の土地は東部の投機業者に買占められてしまった。値上りを待った不在地主の土地は，「投機業者の荒野」となって開拓の進展を妨げ，開拓民はより不便な土地へ行かねばならなかった。また，公有地購入には，とりあえずまとまった現金が必要であったから，高利貸しから借金をせざるを得ぬ開拓民も多かった。フロンティアの自由な筈の土地には，投機業者と高利貸しが待っていたという訳である。(6)

ホームステッド法も，事態の真の解決にはならなかった。たしかに，この法律は無一文の開拓民にも，5年間の開墾に従事すれば公有地を獲得しうる機会を与えた。しかし貧しい移住者が，彼等の夢を実現しえたか否かは別の話である。良い土地が十分にあったかどうか，5年間の開墾にかかる費用をどうするか，という問題があったからである。まず最初の点は，ホームステッド法が，公有地法体系全体のうちで，いかなる位置をしめていたかに関係がある。1862年以降，公有地がこの法律の下でのみ処分されたのであれば，開拓民には有利であったろう。しかし実際には売却政策は続いていたし，他の方法による処分もあった。公有地は鉄道，州政府にも与えられていたし，インディアンの土地は通常ホームステッド法の対象外であった。したがって，移住者を待ち受けていたのは，「只のホームステッドより良い土地あり」という不動産業者の広告であった。一例をあげるならば，1860年代から70年代にかけて，カンザスでは，州政府の土地はエーカーあたり4ドル、鉄道所有地は5ドル以上で売られていた。(7)

次に開墾費の問題がある。ホームステッド法は，未墾の荒野の土地を与えたのであって農場を与えたわけではない。東部の労働者が移住して農場を建設するためには，旅費，役畜や農具の購入費，種子その他の代金に加え，収穫があるまでの期間の生活費が必要であった。もちろん，林地か草原かといった土地の状況，農業の種類や家族構成の如き種々の要素により費用は異なるが，40エーカーの農場でも最低1.000ドルという試算もあり，かなりの金額であったことは確かであろう。19世紀中葉の東部労働者の賃金は日給1ドル程度といわれているので，上記の金額を貯蓄することは容

(6) こうした問題については，ゲイツが多くの研究をしている。論文集として次の書物がある。なお，ゲイツの業績について評価した論文もあげておく。Paul W. Gates, *Landlords and Tenants on the Prairie Frontier : Studies in American Land Policy* (Ithaca, 1973) ; Harry N. Scheiber, "The Economic Historian as Realist and as Keeper of Democratic Ideals : Paul Wallace Gates's Studies of American Land Policy," *Journal of Economic History* 40 (1980), 585-593 ; Jon Gjerde, "Roots of Maladjustment in the Land : Paul Wallace Gates," *Reviews in American History* 19 (1991), 142-153.

(7) Paul W. Gates, "The Homestead Law in an Incongruous Land System," *American Historical Review* 41 (1936), 652-681 ; Fred A. Shannon, "The Homestead Act and Labor Surplus," *American Historical Review* 41 (1936), 637-651.

易でない。しかも，西部で農業に成功するためには，かなりの経験が必要であって，素人には無理である。こうしてみると，安全弁説が成立するか否かは，かなり微妙になってくる。そして，実際に西部へ移住した人々を調べた研究では，東部労働者はあまり含まれていないことが明らかになった。[8]

土地投機の横行，公有地政策の矛盾，農場の建設費の問題などによって，安全弁は働かず，都市労働者が西部農村へ移住することは困難であった。実際には，農村から都市へという逆の流れも見られた。さらに西部は，自由な農民の構成する民主主義社会であるとは限らなかった。大地主，小作農，農業労働者など，ターナーの描いた図には不似合いな人々も，そこには存在していた。しかも土地投機や大土地所有による富は，政治権力の基礎ともなったのであって，彼等は地方の経済を支配するのみならず，やがて州議会議員、州知事，そして国会議員などになってゆく。ターナーが，フロンティアの民主主義を強調したことに対しては，ヨーロッパや東部とのつながりを無視すべきではないとの批判がすでにあった。西部についての研究は，フロンティアが民主的社会であったか否かについても疑問を投げかけたのである。[9]

## 3　ターナー学説からの解放

ヴェトナム戦争や公民権闘争の1960年代は，伝統や権威への反抗の時代でもあった。30年代から40年代にかけて多くの批判にさらされたターナー理論は，第2次大戦後には，むしろ再評価される傾向があった。すでに記したように，フロンティア学説がナショナリスティックな局面を持っていたこと，冷戦の中で，アメリカ民主主義の称揚が求められたことが，その背景にあったであろう。さらに当時台頭しつつあった経済成長論や発展論の視点から見ると，フロンティアの存在や公有地政策には，30年代とは異なる評価が与えられた。こうした再評価は60年代にも継続したのであるが，より目立ったのは，まったく異なる角度からの批判であった。

ひとつは，ターナーが扱わなかったトピック，もしくはターナーが取らなかった見方こそ重要なのだという批判である。ターナーが白人の開拓民の側からフロンティアの歴史を眺めていた，という事実に，それまでの歴史家は気付いていなかったか，もしくはその意味を考えてこなかった。イ

(8) Clarence H. Danhof "Farm-Making Costs and the Safety Valve, 1850-1860," *Journal of Political Economy* 49 (1941), 317-359 ; Carter Goodrich and Sol Davison, "The Wage-Earner in the Westward Movement," *Political Science Quarterly* 50 (1935), 161-185 ; 51 (1935), 61-116 ; Murray Kane, "Some Consideration on the Safety Valve Doctrine," *Mississippi Valley Historical Review* 23 (1936), 169-188 ; Fred A. Shannon, "A Post-Mortem on the Labor-Safety-Valve Theory," *Agricultural History* 19 (1945), 31-37.

(9) こうした問題について，次の論文集を見よ。Vernon Carstensen, ed., *The Public Lands : Studies in the History of the Public Domain* (Madison, 1963). なお，下記を参照のこと。岡田泰男「アメリカ公有地史研究の動向」『社会経済史学』30巻2号 (1964)。

ンディアンの側から眺める必要性，黒人や少数民族の役割りを考える必要性が指摘されたのも当然であった。また白人といっても，ターナーは女性を無視していたという批判もあった。さらにターナーが開拓農民を中心に考え，西部の都市や商人や銀行家にそれほど関心を払わなかったことも確かであった。こうした新たな問題意識や関心は，従来，自由な土地や民主主義へ集中していた研究を分散させていった。

さらに60年代は，民主主義とか個人主義といったアメリカ的価値，あるいは価値観に疑念が生じた時代であった。ターナーがフロンティアに結びつけて論じた美徳は，もはや美徳ではなかったし，暴力や人種差別の如き好ましくないものが，フロンティアに結びつけられる傾向もあった。こうして，西部もしくはフロンティアは，歴史研究の対象として，かつて持っていた魅力を失ったかに感じられた。「アメリカ史の一分野として，西部は生き残れるか？」という論文が書かれたのも，こうした事態を憂慮してのことであろう。アメリカの諸大学の歴史学部では，黒人史や女性史の講座は次々に新設されたが，西部史は減少する傾向があった。そして，ついには，「アメリカ史におけるフロンティアの非重要性，昔々アメリカ西部ありき」などという題名の論文すら発表された。(10)

今日ふり返ってみると，当時の悲観的予想にもかかわらず，60年代の批判は，フロンティア研究の衰退でなく，新たな興隆をもたらしたといえる。一口でいえば，この時期の混乱が，歴史研究者をターナーから解放したのであった。自由な土地や民主主義といった旧来の概念に囚われることなく，インディアンや西部の女性の研究が展開した。ターナー学説を支持するか否かなどという点にこだわることなく，西部の町や商人について研究することが可能になった。そして，70年代以降に生じた資源や環境への関心は，あらためて歴史家の眼を西部へ向けさせた。新しい眼で見ると，フロンティア理論は現代でも通用する面を持っていたし，ターナーの関心の広さも再認識された。(11)

以上述べたことから明らかなように，60年代の批判は30年代のそれとは性質が異なる。それはフロンティア理論を修正する，もしくは内在的に批判するものではなかった。したがって，それらの詳しい内容を紹介することは，本稿の趣旨からして不必要であろう。むしろ，その後の研究の展開により，現代的に生れ変ったフロンティア理論について記することとしたい。

---

(10) W. N. Davis, Jr., "Will the West Survive as a Field in American History? A Survey Report," *Mississippi Valley Historical Review* 50 (1964), 672-685 ; John W. Caughey, "The Insignificance of the Frontier in American History or Once Upon a Time There was an American West," *Western Historical Quarterly* 5 (1974), 5-16 ; Gene M. Gressley, "Whither Western American History? Speculation on a Direction," *Pacific Historical Review* 53 (1984), 493-501.

(11) Jackson K. Putnum, "The Turner Thesis and the Westward Movement : A Reappraisal," *Western Historical Quarterly* 7 (1976), 377-404 ; Richard Jensen, "On Modernizing Frederick Jackson Turner : The Historiography of Regionalism," *Western Historical Quarterly* 11 (1980), 307-322 ; William Cronon, "Revisiting the Vanishing Frontier : The Legacy of Frederick Jackson Turner," *Western Historical Quarterly* 18(1987), 157-176.

## 4　中西部のフロンティア

ターナーがフロンティア理論を発表した頃の「西部」は，今日の西部とは必ずしも地理的に一致するわけではない。たしかに国勢調査によってフロンティアの終了が告げられていたとはいえ，ロッキー山脈以西の地域はまだ未開発であった。太平洋岸地域を含む地域の発展は20世紀の現象といえる。今日では西部と乾燥地域を同一視することが多いが，大規模なダムの建設や灌漑農業の発展は，1893年の時点では将来の話であった。したがって，ターナーの「西部」は，地理的には中西部であって，彼の理論は基本的には中西部の史実をもとに組み立てられていた。現代風にいえば，ターナーは地域史家でもあって，中西部の視点からアメリカ史を論じていたことになるかもしれない。ただ，今日なお中西部はアメリカのハートランドと呼ばれ，最もアメリカ的な地域といわれる。このことは1890年代には，より真実だったのであり，その事実が，フロンティア理論を，中西部史ではなく，アメリカ史の理論たらしめていたと考えられる。(12)

ところで，ターナーの理論が中西部を基盤としていた事実を認識するべきだというのは，それが，より肌理の細かい議論が可能にするからである。ターナー学説を国際比較といった大きな舞台に持ち出し，その有効性を試すのも一つの方法であるが，逆に，中西部という本来の土俵で再検討することも重要である。とくに1960年代以降，国勢調査の原簿（マニュスクリプト・センサス）などを利用して，小地域の研究をすることが盛んになったので，中西部の一つの郡なりタウンシップなりの状況を，フロンティア理論とつき合せて考える試みがなされるようになった。フロンティアと個人主義，経済的平等，立身出世の可能性などのつながりを，中西部の小地域において検証しようという訳である。もちろん，これに近い試みは1930年代にもなされたが，その頃は数量的史料の分析がすべて手仕事であったため，あまりに時間がかかりすぎ、成果は限られていた。(13)

さて，1970年代から80年代にかけて，アメリカの歴史家の関心を集めた問題に，コミュニティー，もしくは人々のまとまりの問題がある。ターナー以来，個人主義がアメリカの特長とされ，村落共同体などはヨーロッパの遺物と考えられていた。しかし，60年代以降の，生活の場としてのコミュニティーの崩壊は，アメリカ人にあらためて，その価値を再認識させた。コミュニティーの細胞た

---

(12)　Andrew R. L. Clayton and Peter S. Onuf, *The Midwest and the Nation : Rethinking the History of an American Region* (Bloomington, 1990).

(13)　開拓者的業績はカーティーによる研究である。もっとも，はるかに先行的なものとして，シェイファーの研究があり，今日からすれば分析が不十分ではあるが，再評価さるべきであろう。Merle Curti, *The Making of an American Community : A Case Study of Democracy in a Frontier County* (Stanford, 1959) ; Joseph Schafer, *Wisconsin Domesday Book, Town Studies* vol. 1 (Madison, 1924) ; *Four Wisconsin Counties : Prairie and Forest* (Madison, 1927) ; *The Wisconsin Lead Region* (Madison, 1932) ; *The Winnebago-Horicon Basin : A Type Study in Western History* (Madison, 1937).

る家族の解体も，同様の認識を強化した。当初，コミュニティーの研究の対象は，ニューイングランドのタウンであったが，それが他地域にも拡がっていった。そして，フロンティアのコミュニティーという，個人主義とは正反対のものが注目されることになった。[14]

ターナーは個人主義を重視したが，必ずしも人々の協同作業を無視したわけではない。とくに後年発表した論文の中では，灌漑農業地域における人々の協力の必要性を認めている。しかし，これは極西部乾燥地帯の話であって，中西部においては開拓農民の個人主義こそが重要であるとされていた。このターナー的見取り図は，たしかに説得力を持つ。中西部の農業地域を見ると，いわゆる集村形態はとっていないので，中核になるような村はない。農家は1マイルも2マイルも離れて点在し，水車小屋，鍛冶屋，宿屋なども分散している。それ故，中西部の大学の農村社会学者は，農村社会もしくはコミュニティーなどというものが存在するか，という問いから出発しなければならなかった。[15]

コミュニティーを，地理的にではなく，社会，経済，人間関係としてとらえる工夫が，社会学者によっておこなわれてきたが，歴史家もそれにならうこととなった。開拓期の中西部の農民の日記，勘定帖，土地譲渡記録などを調べてゆくと，景観的にはコミュニティーの存在などありそうにない中西部にも，人的つながりを軸とした地域社会が形成されていたことが，明らかになった。学校，教会，そして各種の行事が，コミュニティーの存在を探る手掛りともなった。道路建設のための請願書や，その建設，維持の記録は，地域の人々の協力の記録といえるし，いわゆる民兵の組織は，男性に限られてはいるが，まさに地域住民の結合を示している。[16]

こうしたフロンティアのコミュニティーを探る研究の中で，家族の役割が照明をあびるに至った。開拓の最も最初の時点で，親族関係にある何家族かがまとまって移住し，それがいわば核になり，開拓地が拡ってゆくという状況が，歴史地理的方法で示された。また近隣に移住した何家族かが，労働の交換などで協力しあい，やがて息子や娘の結婚を通じて親類になってゆく例も多かった。フロンティアの苛酷な風土の下で，血縁や婚姻によってつながった家族の協力が，経済的にも重要であった。人口移動や土地所有についての研究によれば，フロンティアにおける立身出世もしくは経済的成功は，個人の努力によるよりは，家族の協力のたまものであった。[17]

---

(14) 岡田泰男「アメリカ西漸運動の社会史的考察」『社会経済史学』41巻4号（1975）；Thomas Bender, *Community and Social Change in America* (New Brunswick, 1978) ; Robert V. Hine, *Community on the American Frontier : Separate but Not Alone* (Norman, 1980); W. B. Stephens, *Sources for U. S. History : Nineteenth-Century Communities* (Cambridge, England, 1991).

(15) John Mack Faragher, "Open-Country Community : Sugar Creek, Illinois, 1820-1850," in Steven Hahn and Jonathan Prude, eds., *The Countryside in the Age of Capitalist Transformation* (Chapel Hill, 1985).

(16) John Mack Faragher, *Suger Creek: Life on the Illinois Prairie* (New Haven, 1986).

(17) Faragher, *Sugar Creek* ; Hal S. Barron, *"Listening to the Silent Majority : Change and Continuity in the Nineteenth-Century Rural North," in* Lou Ferleger, ed., *Agriculture and National Development : Views on the Nineteenth Century* (Ames, 1990).

フロンティアの人口が極めて流動的であることは，多くの研究が示している。しかし，同じ場所に20年，30年と住みついている人々もいたことも事実であった。いかなる人々が流動的で，どんな人々が安定的であるかについて，従来の研究は，豊かな人々ほど移動率が低いことを明らかにしている。これは国勢調査の財産の項目を調査した結果であるが，最近これに土地譲渡や地税など，土地所有に関する史料を加えた研究がなされている。人口移動率の高さは，土地市場の流動性の高さともなって現われているが，ここでもやはり安定的土地所有者が存在することが見出された。それでは，いかなる人々が安定的土地所有者か。[18]

ウィスコンシンのあるタウンシップについての研究によれば，10年間に5回も6回も所有者の変わる土地もあれば，30年間，同じ所有者のもとにある土地もある。全体の傾向として，開墾初期ほど転売は多く，時代が進むにつれ，安定性が増してゆくが，その際安定的所有者の所有面積も増加してゆく。彼等の土地を見ると，親類もしくは家族の土地がまとまって近くに存在することが多い。また世代間のつながりも強く，二代目，三代目の所有者も多い。結局，家族もしくは世代間の絆のある者ほど，安定的で，かつ所有面積も大きい。こうした絆を持つ人々が，豊かで移動率の低い人々でもあった。同じような状況は，外国からの移民の場合にも見られたことが，ミネソタのドイツ移民の研究で明らかにされている。[19]

ところで，こうした安定的土地所有者，継続的居住者が，コミュニティーの中核となってゆくのであるが，地域社会の人々を結びつけるものは，単に結婚や親類関係といった家族の絆だけではない。もう少し広い範囲の人々を結びつけるものとして，宗教の役割，消防団や民兵組織に示されるような自発的集団の役割が重視されるようになった。フロンティアの教会は，同じ信仰，同じ価値観を持つ人々を結びつけたのであり，コミュニティーの核を形成する上で重要な役割を果した。なお，これまで念頭においてきたのは，主にフロンティアの農村であるが，「都市のフロンティア」という言葉もあるように，都市的集落も存在した。ターナーの図式の中では，都市は開拓の発展の最後の段階であるが，実際には，もっと初期から存在し，地域の開拓の拠点となった。都市の場合には，コミュニティーの存在は自明であるが，その核になったものとして，やはり教会や商人の自発的集団があげられている。[20]

---

(18) Mildred Throne, "A Population Study of an Iowa County in 1850," *Iowa Journal of History* 57 (1959), 305-330 ; Seddie Cogswell, Jr., *Tenure, Nativity and Age as Factors in Iowa Agriculture, 1850-1880* (Ames, 1975) : Richard H. Steckel, "Household Migration and Rural Settlement in the United States, 1850-1860," *Explorations in Economic History* 26 (1989), 190-218.

(19) Sean Hartnett, "The Land Market on the Wisconsin Frontier : An Examination of Land Ownership Processes in Turtle and La Prairie Township, 1839-1890," *Agricultural History* 65 (1991), 38-77 ; Kathleen N. Conzen, "Peasant Pioneers : Generational Succession among German Farmers in Frontier Minnesota," in Hahn and Prude, *The Countryside* ; Mark Friedberger, "The Farm Family and the Inheritance Process : Evidence from the Corn Belt, 1870-1950," *Agricultural History* 57 (1938), 1-13.

(20) Yasuo Okada, "Religion, Community, and Growth in the American West," *Keio Economic* ↗

さて，ターナーが，フロンティアを「人種のるつぼ」とした点については，1960年代以降，多くの批判がなされた。しかし，アメリカが「るつぼ」であるよりは，「サラダボウル」や「モザイク」であるという表現は，主に都市を中心にした考え方で，中西部の農村地帯には，ターナー的な「るつぼ」が当てはまるのではないかという印象が強い。外国移民といっても，この地域は主にヨーロッパ系の白人が移住したのであり，融合しやすい人種的，文化的背景を持っているからである。しかし，フロンティアにおける家族の絆の重要性を考えると，やはり民族の絆も重要であったのではないかと思われる。そして，前記のドイツ移民の研究や，スカンジナヴィアの農村からの移民の研究は，まさに外国移民の絆の強さを，様々な面で示しており，中西部農村といえども，「るつぼ」理論が常に当てはまるわけではないことが分かる。[21]

かかる研究のつみ重ねの中で，次第に明らかになってきたことは，フロンティアと東部，さらにはヨーロッパとのつながりの重要性である。フロンティアは，ターナーによれば「新たなスタート」の場であり，過去との絆を断ち切り，個人主義，民主主義を発展させてゆくところであった。これに対し，すでに1930年代から，民主主義が西部の産物ではなく，東部さらにはヨーロッパの民主主義との関連を無視すべきではないとの批判はあった。しかし，近年の研究は，単に政治制度のみならず，生活様式や価値観においても，フロンティアの住民が，東部と結びついていたことを強調している。中西部にニューイングランドから移住した開拓民を調べた研究は，ミシガンの状況を理解するためには，コネチカット川流域の歴史を知らねばならないという。移住者は，フロンティアで新しい生活を始めようとしたのではなく，過去の生活を再現しようとした，という訳である。[22]

この点を，もう少し即物的に，作物や家畜の面から眺めておこう。西部への移住者には，なるべく同じ緯度の地域へ移住するという傾向があった。例えば中西部の一つの州をとり，外部からの移住者の出身地を調べてみると，州の北側には北部からの移住者が多く，南側には南部出身者が多く存在する。これは移住距離をなるべく短かくして移住費用を少なくするためとも考えられるが，むしろ前の土地での経験が生かせることが重要であった。例えばとうもろこしの成長には，一日の間の日照時間が大切で，緯度がずれると成育が早すぎたり遅すぎたりして，収穫が減ってしまう。綿花は，200日の無霜期間が必要で，緯度が高すぎると作れないが，小麦の場合には南より北の方が向く。家畜の場合にも，牛や馬は北に向くが，ラバは南に向くということがあり，また同じ牛でも，ニューイングランド人はデヴォン種を，南部人はスペイン種を好む傾向があったりする。以前，住んでいた場所から，あまり北や南へそれて移住すると，失敗することの多いこと，気候，土壌，地

---

↘ *Studies* 27 (1990), 1-15; Don H. Doyle, *The Social Order of a Frontier Community : Jacksonville, Illinois, 1825-70* (Urbana, 1978).

(21) Jon Gjerde, *From Peasants to Farmers : The Migration from Balestrand, Norway, to the Upper Midwest* (New York, 1985).

(22) Clayton and Onuf, *The Midwest*.

形が似ているほど，経験という形での従来からの投資が生きることに，開拓民は気付いていた。家屋の材料や建て方，衣服の素材，食料の調理法や保存法など，衣食住のすべての面において，同じことがいえる。但し，大平原を越えて乾燥地帯へ行ってしまったり，太平洋岸西部まで移住してしまうと，同じような緯度でも環境は全く異なり，中西部と一律に論ずることはできない。[23]

以上，ターナーの本来の土俵であった中西部のフロンティアを振りかえってみると，コミュニティー，家族の絆，東部やヨーロッパとのつながりが重要な意味を持っていたことが分かる。ターナーの強調するフロンティアの新しい機会を生かすためには，過去の遺産が大きな役割を演じたといえよう。しかし，過去の遺産が，旧体制として社会，経済の変化や成長を阻害することなく，むしろ自由な環境の中で発展を助けた点は，ヨーロッパとアメリカの違いである。最後に，フロンティアの存在がアメリカの経済発展にいかなる影響を与えたかについて，中西部と限定せずにもう一度考えてみよう。フロンティア理論は必ずしも経済史の理論ではないが，極めて経済史的色彩が濃いことは，冒頭の引用文を読みなおしてみれば明らかである。したがって本稿をこのような形でまとめることも許されるであろう[24]

## 5　フロンティア理論の評価

自由な土地，経済的平等，立身出世の自由，民主主義といった言葉は，個人のレヴェルでも国民経済のレヴェルでも考えることができる。フロンティアへ移住した開拓者個人個人の立場で考えた場合，1930年代以降のターナー批判は，彼等が十分な機会や恩恵を享受できなかった点を強調した。しかし，60年代以降，最近に至る研究の中で，例えばホームステッド法にしても，それなりの効果は上げたこと，この法律の下で土地を取得した農民が永続的居住者として，コミュニティーの核になっていったことが示されている。そして，マニュスクリプト・センサスの計量的分析にもとづく研究は，少くとも北部においては，フロンティアの存在が，個々の移住者の経済的上昇を可能ならしめたこと，しかもそれはシカゴのような都市においても見られたことを示している。もちろん，すべてがバラ色に彩られているわけではないが，20世紀末の暗い時代から見れば，フロンティアの

(23)　Richard H. Steckel, "The Economic Foundations of East-West Migration during the 19th Century," *Explorations in Economic History* 20 (1983), 14-36.

(24)　アメリカの特色を，ターナーとは反対に，ヨーロッパとのつながりによって理解しようとする最近の試みとして，次を見よ。David H. Fischer, *Albion's Seed : Four British Folkways in America* (New York, 1989). また，ターナーおよびターナー学説に関する最近の業績として，下記も参照せよ。最初の2冊は史学史として興味深い。Gerald D. Nash, *Creating the West : Historical Interpretations, 1890-1990* (Albuquerque, 1991) ; Richard W. Etulain, ed., *Writing Western History : Essays on Major Western Historians* (Albuquerque, 1991) ; William Cronon, George Miles, and Jay Gitlin, eds., *Under an Open Sky : Rethinking America's Western Past* (New York, 1992).

存在した時代は，個人にとって良い時代であったという印象になるのかもしれない。さらに，個人のレヴェルから離れ，国民経済のレヴェルで考えたとき，この想いは一層深いものとなるであろう。[25]

19世紀は工業化の時代であるが，工業化が成功するためには，食料および原料の供給という点で農業生産の拡大が必要であるし，需要の面から見れば，市場としての農村が豊かでなければならない。もちろん，19世紀は開放経済の時代であり，アメリカへは大量の資本と労働力が入ってきたし，綿花や小麦にとっての海外市場の重要性は否定できない。しかし，アメリカの経済成長にとって国内市場の果した役割が大きかったことも明らかであり，農業の持つ意味も当然大きかった。こうした点からフロンティアの意義を考えてみよう。[26]

まず，農業生産の拡大にとって，西部の存在はどんな意味を持ったか。開墾の進展によって生産量が増大するのは当然の話であるので，これを生産性の上昇，とくに農業労働の生産性の上昇という点から見てみたい。アメリカは新開地であるから，まず開墾労働が重要であるが，この生産性は例えば1850年と1900年を比較すると3倍以上に延びている。これは西漸運動（開墾する土地の変化）によるものか，あるいは技術変化によるものか。1850年の段階で森林地エーカーあたりに必要な労働日数は33日，草原地は1.5日であった。これが1900年になると，前者は25日，後者は0.75日に減少している。しかし，この変化はそれ程のものではない。むしろ開拓が西へ進み，森林地よりは草原地の多い地方へ移ったことが重要であった。19世紀中葉には開墾地の80%は森林であったが，世紀末には草原は70%をしめていたからである。[27]

次に作物の生産に移り，小麦の例を見よう。アメリカの場合，エーカーあたり生産量の伸びより

---

(25) ホームステッド法の再評価については下記を見よ。Paul W. Gates, "The Homestead Act : Free Land Policy in Operation, 1862-1935," in Howard W. Ottoson, ed., *Land Use Policy and Problems in the United States* (Lincoln, 1963) ; 岡田泰男「ホームステッド法の効果——ネブラスカ州ゲイジ郡の場合」『三田学会雑誌』65巻10号（1972年）; William F. Deverell, "To Loosen the Safety Valve : Eastern Workers and Western Lands," *Western Historical Quarterly* 19 (1988), 269-285; Rodney J. Valentine, "Pioneer Settlers' Abuse of Land Laws in the Nineteenth Century : The Case of the Boise River Valley, Idaho," *Agricultural History* 67 (1993), 47-65. フロンティアの機会については，例えば下記を見よ。Robert A. Burchell, "Opportunity and the Frontier : Wealth Holding in Twenty-Six Northern California Counties, 1848-1880," *Western Historical Quarterly* 18 (1987), 177-196 ; David W. Galenson and Clayne L. Pope, "Economic and Geographic Mobility on the Farming Frontier : Evidence from Appanoose County, Iowa, 1850-1870," *Journal of Economic History* 49 (1989), 635-655 ; David W. Galenson, "Economic Opportunity on the Urban Frontier : Nativity, Work, and Wealth in Early Chicago," *Journal of Economic History* 51 (1991), 581-603.

(26) Stanley Lebergott, "The Demand for Land : The United States, 1820-1860," *Journal of Economic History* 45 (1983), 181-212 ; Jeremy Atack and Fred Bateman, *To Their Own Soil : Agriculture in the Antebellum North* (Ames, 1987).

(27) William N. Parker, "Quantification in American Agricultural History, 1850-1910 : A Re-examination," *Agricultural History* 62 (1988), 113-132.

も，労働者あたり生産量の増加の方が著るしかったことは良く知られている。イギリス的な集約農業の進展ではなく，機械化の促進が目立ったのであり，このこと自体フロンティアの豊富な土地の影響といってよい。1850年から1900年にかけて，合衆国全体として見ると，エーカーあたり小麦生産量（ブッシェル）は11.3から14.0にしか伸びていない。しかし，収穫労働に必要な時間の方は，エーカーあたり13.9から2.3へと大幅に減少している。もっとも，収穫労働時間の東西の差を眺めてみると，1850年では同一，1900年で東部は3.0，西部は2.3と，それほどの差はない。開墾労働の場合と異なり，収穫労働の生産性は，西方への移動によって上昇したというより，一般的な機械化によるところが大きかった。[28]

ところで，機械化とフロンティアの存在との関係はどうであろうか。土地は豊富であるが労働力は不足しており，高賃金のため機械化が進むという議論は，素朴すぎて受入れられない。アメリカでは資本も不足しており，機械化には資本が必要だからである。とはいえ，労働力不足，高賃金という事実は否定できない。たしかに，東部労働者が西部へ移住して農民になるという直接的安全弁は働かなかったかもしれない。しかし，1850年頃，イギリスでは1エーカーの土地を購入するのに，労働者の60週分の賃金が必要だったが，アメリカでは，それが3週分で足りたという計算もある。労働者になるか農民になるか，労働者のままでいるか農民になるか，という選択の幅は，アメリカの方が当然大きかったのであり，それが高賃金の一因であった。一方，農民の立場になれば，土地のコストの低さは明らかに有利であり，農業機械購入にまわせる余裕が生じたと考えられる。工業製品の市場としての農村の重要性からして，このことの意義は大きい。[29]

もっとも，農業機械化といっても，動力は蒸気力ではない。アメリカにおいては，1920年代のトラクター導入以前，農業機械はもっぱら畜力，具体的には馬に頼っていた。これはやはり，土地の安さ，牧草地や飼料の安さに関係がある。イギリスとアメリカの役畜飼育費を比較してみると，19世紀中葉の時点で，イギリスはアメリカの約6倍であった。イギリスでは役畜に費用がかかることが問題であったが，アメリカではそうではなかった。こうした相違は農業に限ったことではない。そこで，もう少し一般的に，どのような技術を使用するかという観点から，この問題を考えてみよう。[30]

フロンティアの存在は，別の表現をすれば資源の豊富さということになる。それ故，アメリカの技術は，例えばイギリスのそれに比較して，資源多用的もしくは浪費的であった。イギリスでは木材は不足していたが，アメリカは無尽蔵と思われたほどの森林に恵まれていたので，製材や木材加

(28) Parker, "Quantification" ; Atack and Bateman, *To Their Own Soil*, 186-200.

(29) H. J. Habakkuk, *American and British Technology in the 19th Century* (Cambridge, England, 1962) ; Peter Temin, "Labor Scarcity in America," *Journal of Interdisciplinary History* 1 (1971) 251-264 ; Paul P. Christensen, "Land Abundance and Cheap Horsepower in the Mechanization of the Antebellum United States Economy," *Explorations in Economic History* 18 (1981), 309-329.

(30) Christensen, "Land Abundance."

工において，著るしく原料浪費的であった。製鉄業において，木炭鉄が長く存続したことや，蒸気機関の採用にあたり，燃料消費量の多い高圧機関が好まれたのも，このためであろう。19世紀半ば，アメリカにおける木材消費量は，国民1人あたり，イギリスの5倍と推定されている。水力も豊富であったので，アメリカ東部で使用された水車は大型であったといわれる。新技術の開発もしくは採用にあたり，資本の面での制約はあったが，資源の面では制約のないことは，有利な条件であった。アメリカにおける機械化は，こうした環境の下で急速に進むことができた。フロンティアの存在は，国民経済のレヴェルで考えても，アメリカにとっての恩恵であるといえよう。[31]

このことは，もしフロンティアがなかったならば，と考えてみれば明らかであろう。アメリカの領土が，例えば植民地時代のそれに限られていたならば，あるいは独立時の範囲に限定されていたならば，アメリカの経済や社会の発展は異なる様相を呈していたに違いない。本稿では，この点について論ずる余裕はないが，カリフォルニアのゴールドラッシュも，テキサスのカウボーイもないアメリカは，移民にとっても歴史家にとっても，魅力が減少したに違いない。さらに，ターナーによってフロンティアが発見されなかったならば，アメリカ史の見方が大きく変っていたに違いないことも明らかである。もしかすると，それはヨーロッパ史の一部に留っていたかもしれない。こんなふうに考えてみると，フロンティア理論の意義は，100年後の今日も否定することはできない。最初に書いたように，それは古典ではあるが骨董品ではないのである。

〈付記〉

本稿は1993年12月に脱稿したが都合により発表が遅れた。なお筆者の研究を集めたものとして，近刊の下記の書物を参照されたい。岡田『フロンティアと開拓者——アメリカ西漸運動の研究』（東京大学出版会）。

（経済学部教授）

(31) Nathan Rosenberg, *Technology and American Economic Growth* (New York, 1972) ; Louis P. Cain and Donald G. Paterson, "Factor Biases an Technical Change in Manufacturing : The American System, 1850-1919," *Journal of Economic History* 41 (1981), 341-360.